実践事例１

第３学年公民的分野
「よりよい社会を目指して～ＳＤＧｓ～」
「コンパクトシティ政策」で
よりよい社会の実現は可能か

１．単元開発の理論編

(1) ＳＤＧｓとコンパクトシティ政策

①ＳＤＧｓとは

ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）とは，2001年に策定されたＭＤＧｓ（ミレニアム開発目標）の後継として，2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2016年から2030年までの国際目標である。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され，″leave no one behind″(誰一人として取り残さない)を誓ったもので，ＳＤＧｓは発展途上国のみならず，先進国自身が取り組むユニバーサルなものであり，日本は政府、企業、教育界が連携して積極的に取り組むことを表明している。

▲ ＳＤＧｓ(持続可能な開発目標）17のゴール

②コンパクトシティ政策（以下，ＣＣ政策）とは

コンパクトシティという用語はアメリカのＧ．Ｂ．ダンツィク，Ｔ．Ｌ．サアティ著書『コンパクト・シティ』(1974年)が初出である。モータリゼーションの進行により深刻になった環境問題や中心市街地の空洞化問題への対応として，1990年代初頭から欧米諸国の都市政策においてコンパクトシティの概念が注目されるようになったとされる。このＣＣ施策の目的は，欧米においてはモータリゼーションの進行によりスプロール化し，中心部が空洞化した都市を政策的に再集積させることによって中心市街地の居住者を増やし，商業活動を活性化し，公共サービスを効率化することによって財政支出を縮減しようというものである。そして，高齢化社会を見据え，自家用車に頼る必要のない歩いて暮らせる街で，鉄道やバスなどの公共交通を移動軸として，拠点となる駅やバス停から400ｍ程度の徒歩圏に住宅，商店，公共施設などの都市機能を集約する街の姿が将来的に目指されるものとされる。

③富山市のコンパクトシティ政策

政府は地方創生と中長期的な持続可能なまちづくりを推進すべく，積極的にＳＤＧｓに取り組んでいる国内29の自治体を2018年６月15日「ＳＤＧｓ未来都市」として選定した。

併せて，富山市のＣＣ政策は中でも先導的な取組で，多様なステークホルダーとの連携を通じて地域における自律的好循環が見込めるものとして，「自治体ＳＤＧｓモデル事業」10事業の１つにも選定した。

富山市は，人口増加とモータリゼーションの進展により市街地が外延化し，中心市街地の人口減少と商業機能の低下，公共サービスコストの増大という問題が生じた〈図１〉。

(「コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築～公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり」より)

図１　富山市を取り巻く諸問題

これに対して，市では鉄道やバスなどの公共交通を軸として生活拠点をつなぐことによって，歩いて暮らせるコンパクトなまちづくりを目指し，2006年には全国初の本格的ＬＲＴの「富山ライトレール」が，2009年には市内電車環状線「セントラム」が開業した。富山市では２万人余の人口がある436haの範囲の中心市街地と鉄道で結ばれた各駅周辺に集約する生活拠点を含めてコンパクトシティと捉え，「団子と串の都市構造」(「団子」が駅周辺の生活拠点で，「串」が公共交通網）と表現している〈図２〉。

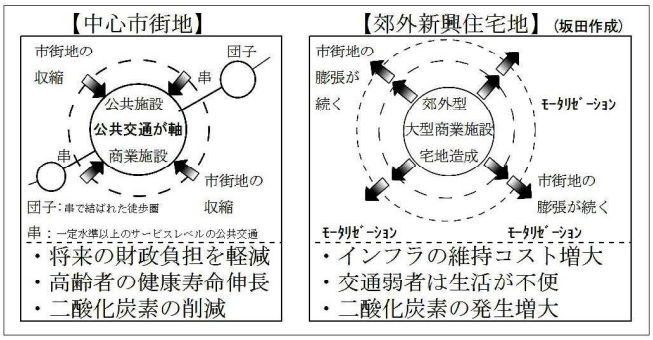

図２　中心市街地（コンパクトシティ）と郊外新興住宅地の概念（授業者作成）

⑵コンパクトシティ政策の理論的な根拠
…社会科の本質（前掲）と本実践との関わり

ＣＣ政策の理論的な根拠としては，「シビル・ミニマム」という理念，「シビック・プライド」の醸成，「システム思考」が挙げられる。

■ シビル・ミニマム
・地域が備えていなければならない最低限の基準。
・基準を設定するのは，市民・自治体といった当事者であるとする考え。

■ シビック・プライド
・地域に住んでいることへの誇り，愛着。
・誇りがあると人々はまちづくりに主体的に参画し始める。

■ システム思考
・システムがいかに働き合ってるかを理解する能力。
・機能している異なった要素が相互に作用していることについて概念的に理由づける能力。
・システム思考は価値判断や意思決定を行うことができる力，システムを評価することができる力。

①「シビル・ミニマム」とは

都市における市民の最低限の生活環境基準のことをさし，第二次世界大戦後のイギリスの社会保障に関する「ビバリッジ報告」のなかのナショナル・ミニマムの語に示唆を受けて自治体専門家の間で用いられるようになった和製英語であるとされる。ナショナル・ミニマムは，地域のいかんにかかわりなく，全国民を対象にして最低限の生活が保障される水準をさすのに対し，シビル・ミニマムは市民が生活を営むうえにおいて，地域社会が当然に備えていなければならない最低限の基準（市民が安全・健康・快適・能率的な生活を営む上で必要不可欠な最低条件）をさす。日本の高度成長政策は1960年代の後半にそのひずみを多様な形で噴出した。公害が普遍的な社会問題化し，開発や都市の過密化，モータリゼーションの激化，都市の地価上昇などを招き，都市問題を激化させた。さらに，いわゆる経済的弱者に対する生活保障の問題なども不可避となる中，「シビル・ミニマム」はこうした状況への対応の理念として出てきた。具体的には，都市型社会における生活の社会化に伴って必要とされる社会保障，社会資本，社会保険などの整備を目ざし，実際にこの理念によって，自動車排ガス規制などの公害規制，諸医療費の軽減，公園・下水道・公営住宅などの整備が行われた。さらに，これらの基準を設定するのは市民ないしその自治機構としての自治体であるとされている。

②「シビック・プライド」とは

地域に住んでいることへの誇り，愛着を意味する。コンパクトシティ政策を推進していくことで，地域住民の誇りや愛着が醸成され，これらの人々がやがてまちづくりに主体的に参画していくことが期待されるとする考え方である。

③「システム思考」とは

すべてのシステムがいかに働き合っているかを理解する能力のことをさす。例えば，システムのある部分におけるアクション，変化，不具合が，他のシステムにどのような影響を及ぼすかを理解する能力をいう。あるいは，機能している異なった要素が相互に作用していることについて概念的に理由づける能力のことをさす〈図３〉。さらに，システム思考には，価値判断や意思決定を行うこと，システムを評価することが含まれるとされている。

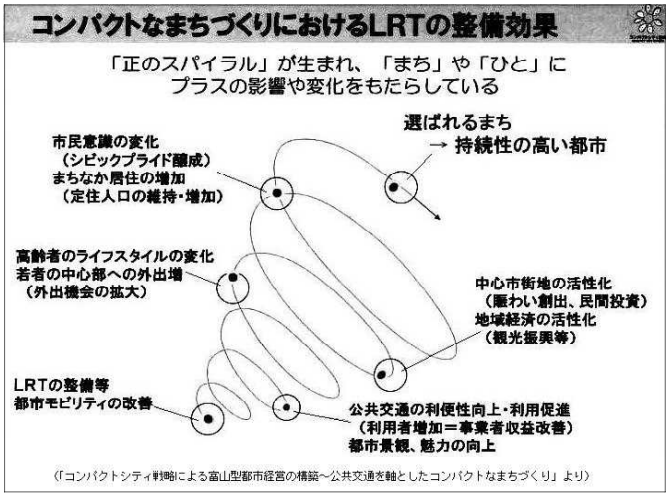

図３　システム思考（ＣＣ政策の場合）

以上①～③の下線部からも，ＣＣ政策に関する学習は，社会科の本質にある社会認識形成や市民的資質育成に資することができると考えられる。

２．単元開発の実践編

(1)単元構成と《問い》の型

第１次：ＳＤＧｓとは何だろうか。**《What型》の問い**

第２次：なぜ，富山市はＣＣ政策が推進しているのだろうか。**《Why型》の問い**

第３次：富山市が抱える問題を解決するために，ＣＣ政策を今後(10年･20年先)も続けていくとよいだろうか。**【本時】。《Which型》の問い**

第４次：よりよいまちづくりをすすめるためには，どうすればよいだろうか。**《How型》の問い**

(2)「身に付けさせたい力」と「問い」の相関

単元・本時で身に付けさせたい力(知識・概念・価値)を「知識の構造図」として位置づけ，対応する「問い」を「発問の構造図」に位置づけることで，授業者は社会的な見方･考え方を深めたり拡げたりする授業を構成することができる。さらに，授業者・学習者の事後評価として用いることもできる〈**図４**〉。

【知識の構造図】		【発問の構造図】
～すべきである。 ～はよいことである。	価値	どうしたらよいですか？ どちらがよいですか？
～だから(ならば)， …である。	概念	なぜ…なのですか？ どうして…なのですか？
…は，…である。 …は，…となった。	知識	いつ？どこで？だれが？ 何を？どのような？

図４　身に付けさせたい力と「問い」の相関イメージ

(3)本時の展開(略案)と討論で出された生徒の意見

1　本時の学習課題と前時までの学習を確認する。

富山市が抱える問題を解決するために，ＣＣ政策を今後(10年･20年先)も続けていくとよいだろうか。

2　学習課題に対して意見交換【討論】する。

A案：よい。 （うまくいくと思う）	B案：よくない。 （うまくいかないと思う）
・高齢者が多く住む地域に公共交通網が整備されているので，高齢化に対応できる。 ・中心部の賑わいが生まれ，流入人口や児童数が増加していくことが見込まれる。	・中心部だけに財政が投入されることは納税者にとって公正ではない。 ・子育て世代は郊外の広い家に住む人が多い。中心部に住もうという人は増えない。

※『判断の基準』を想起しながら，妥当性の検証のための話合い

3　次時の学習課題を確認する。

(4)討論活動後の学習

「富山市が抱える問題を解決するためには，どのようなまちづくりを行っていけばよいだろうか。」について意見をまとめるため，以下の方法をとった。

①富山市と都市形態が類似し，ＣＣ政策の先行事例であるポートランドの取組を活用する〈**図５**〉。

1960年代までのポートランドは、車社会が当然のアメリカによくある都市のひとつだった。
1979年を転機に、ポートランドは都市部と農地や森林などの土地利用を区分する「都市成長境界線（以下、境界線）」を導入し、“脱・車社会”を決断した。今では「全米一住みたい町」に。

自転車を載せるスタンド付きバス

町が賑わう「ミックスドユース」

図５　ポートランドのＣＣ政策の先行事例

②ＣＣ政策について，富山市長の「市長出前トーク」を招聘し，プレゼンテーションを視聴したのち，市長と生徒によるディスカッションを行う。

▲ 市長と生徒のディスカッションのようす

ディスカッション後の生徒はＣＣ政策が必要である理由を，次のようにワークシートにまとめていた。

- 今後，人口減少は避けられない現実がある。
- 地方都市としてやれることは，人口減少を食い止めることではなく，少しでも緩やかにすることである。
- 理想だけでは人は定着しない。雇用を生むことが大切。働く場所無くして，人口減少に歯止めはかからない。
- 現在，富山市の流入人口は微増を続けている(社会増)。
- 女性の人口回帰が見られるのが特徴である。
- 公共交通を軸としたまちづくりを，市長は説明責任ならぬ「説得」責任をもって取り組んでいる。
- 歩いて生活することで高齢化対策になる。90%近くの人は500m歩けば，公共交通がある町になっている。
- 低密度化した市街地に対する財政コストの削減は，今から取り組まないと間に合わない。
- 選んでもらえる町になるためには，シビック・プライドを高めることが大切である。
- 最終的に住む場所を決めるのは自由であり，住むところを強制する政策ではない。

３．評価

(1) プリテスト（事前評価）とポストテスト（事後評価）

プリテストとポストテストとの結果を客観的に比較するため，統計学的処理を行って評価した。

生徒の回答の多くは次の通りである。〈図６〉

Q,郊外に住宅地や商業施設が広がると、どのようなデメリットが出ますか？（複数回答，回答の多い順）

プリテスト	ポストテスト
1 中心部を衰退させる。	1 自動車依存が高まる。
2 郊外の自然がなくなる。	2 二酸化炭素排出量が増える。
3 騒音など近所トラブルがおこる。	3 郊外でも高齢化が起きる。
4 交通事故や渋滞が発生する。	4 公共交通が全体的に衰退する。
5 二酸化炭素や排ガスが増える。	5 行政コストが増えて非効率。
6 中心部から郊外へ車が必要。	6 中心部と郊外のアンバランス。
7 ドーナツ化が起きる。	7 いずれは大型施設も撤退する。

図６　プリテストとポストテストの比較

また，生徒の回答を比較すると，教師が指示していないにもかかわらず，矢印（→）を用いて相互の関連性を説明するもの，つまり「システム思考」を用いて回答する生徒が増加した〈図７〉。

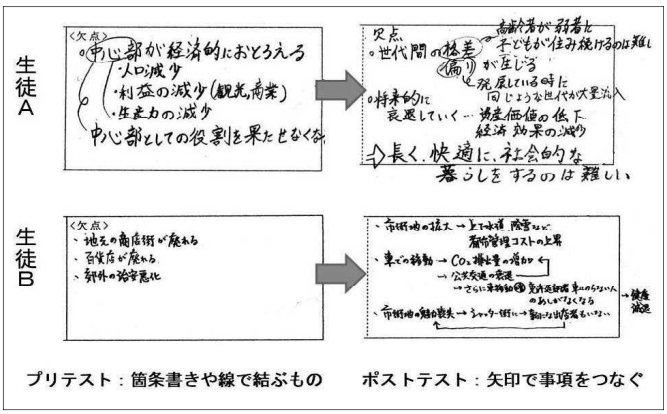

図７　生徒の回答の変化（一例）

これらの変容について，ｓＡ（１要因参加者内）を用いて統計処理を行った。〈図８〉

プリテスト	ポストテスト	人数
システム思考（○）	システム思考（○）	１０
システム思考（×）	システム思考（×）	１６
システム思考（×）	システム思考（○）	１２４

ｓＡ（１要因参加者内）

S.V	SS	df	MS	F
subj	12.8800	149	0.0864	
A	51.2533	1	51.2533	710.62 **
sxA	10.7467	149	0.0721	
Total	74.8800	299		+p<.10 *p<.05 **p<.01

図８　ｓＡ（１要因参加者間）　　ｎ＝150

結果，***統計的に有意（**）である***ことから，授業と生徒に身に付けさせたい力である「システム思考」との相関について，客観的に証明することができた。

４．成果と残された課題

(1) 成果【本校の研究の視点①～③との関わり】

- よりよいまちづくりを考えることを通して，「現在世代と将来世代のニーズを達成すること」や「経済・環境・社会の統合的な発展」について考えることができた。**【視点①・②】**
- プリテストとポストテストの比較で身に付けさせたい力と授業との相関について，統計学的に数値化し，「システム思考」を身に付けることができた点を客観的に評価することができた。**【視点①】**
- 身近な事例である富山市の課題を扱い，世界の先行事例の調査や富山市長とのディスカッションを通して，よりよい社会の一員として社会に参画しようとする態度である「シビック・プライド」の醸成を促すことができた。**【視点②】**
- 問いの型を整理して単元を構成したことと、「身に付けさせたい力」を「知識の構造図」に、「問い」を「発問の構造図」に位置付けたことで、社会的な見方・考え方を深めたり拡げたりする授業構成をとることができた。**【視点①・③】**

(2) 残された課題

- 「シビル・ミニマム」の位置づけが不十分だったので，今後の授業で扱う地方自治，財政，社会保障の単元で想起させる必要がある。**【視点①・②】**
- 公民の導入としての「よりよい社会を目指して」を扱ったことで，公民的分野の政治･経済･法の見方を用いていく必要感は高まったと言えるが，政治・法・経済の「現代社会の見方・考え方」が生かせないことから，「よりよい社会」の捉え方は限定的なものになったと考えられる。**【視点②】**

(3) 残された課題に対するフォロー

社会科最後の単元「よりよい社会の実現」では，ＳＤＧｓを取り上げて，生徒各自の課題意識に基づいてレポートを作成した。社会科３分野（地･歴･公）で身に付けた見方・考え方を用いながらレポートを作成したり意見交換したりしたことで，生徒は自らの将来とこれまでの学びを結びつけることができ，「社会科３年間の学びを活用・発揮・実感することができた」と，レポート発表後の振り返りワークシートに記述していた。**【視点②】**

（授業者：坂田元丈）